日本大学
三島
同窓会々報

第20号

平成元年10月20日
静岡県三島市文教町2
日本大学三島同窓会発行

〝日本大学〟これこそ
未来のキャッチフレーズです
（日本大学創立百周年記念標語）

平成元年度
常任幹事会・幹事会開催される

◎常任幹事会

平成元年六月二日㈮十八時三十分より、母校本館三階小会議室で開催され、幹事会、総会開催の件、会報発行等の事項について審議された。

◎幹事会

平成元年六月二十八日㈬十八時より、母校八号館二階において開催された。

会は久保田勝氏の司会で進められ、中嶋信行会長の挨拶の後、議長団、書記が選出され、議長に宮沢主計氏、副議長に中浜卓弥氏、書記に後藤幸江氏、角田由美氏を選出し、次の事項が審議された。

議　事

一、昭和六十三年度事業報告
一、昭和六十三年度決算報告
一、監査報告
一、平成元年度事業計画
一、平成元年度予算案
一、平成二年度役員候補の件
一、終身会費改正とそれに伴う規約改正の件
一、顧問委嘱内規の件
一、各科活動状況報告

事業報告、事業計画は角田義廣事務局長、予算、決算も土屋忠得会計担当常任幹事の代理に角田義廣事務局長から説明、続いて監査報告は会計監査が欠席のため、宮川守常任幹事よりそれぞれ説明された。

続いて平成二年度役員候補の件について審議され、本年度に引き続き、来年度も役員をお願いすることになった。

また規約第二十五条の終身会費の現行壱千円を参千円に改正することが承認され、次年度より委託徴収できるように、学校側と折衝することになった。

維持会費の件については色々と意見が出され検討されたが、承認されず再度執行部で見直すことで保留となった。

また顧問委嘱内規の件については全員一致で承認され、各科活動状況報告は何もなく、渡辺勝一副会長の閉会の挨拶で幹事会を終了した。

幹事会に続いて懇親会が同会場にて盛大に行われた。

開講式当日、三島同窓会長賞（副賞奨学金）が、中嶋会長から三名の学生に授与された。

思い出すままに

溝口梅夫
（昭和22・23年度予科在籍）

入学式の夜が入寮式であった。ほの暗くなる時分であったから、多分午後六時頃ではなかったろうか。南寮前庭の一段低まった広場に入寮生が全員集合し、寮の委員の大演説が始まった。私の記憶に残っているのは大西寮長の「妥協なき人生」と喝破した、いかにも哲学臭の濃い獅子吼である。

南寮一号室があてがわれた。二階の一番右端の部屋である。部屋はだだっ広く、両方の仕切りの真ん中に大きなテーブルが一つあった。一年生が何人いたかわからないが、三年生まで含めて八人位はいたろうか。

その夜歓迎ストームに見舞われたかどうか、あれは入寮の時ではなく、二年になった時のことだったのかどうか、どうも記憶に定かではないが、部屋毎に自己紹介やら雑談やらはあって、仲々寝つかれなかったことは覚えている。

その頃、学泉寮という名前はあったが、各寮の名前はついていなかった。それに寮長はいたけれど、組織はほとんどできていなかった。寮は、いわば出来立てのホヤホヤだったのである。

寮の建物も不揃いであった。集会場もなかった。一からの出発であった。

私達が入寮した時の寮長は、米内さんではなかったろうか。それから直ぐ豊田さんに代わった。豊田さんに代わって、我々一年生が大量に入って来たため発言力がにわかに増したような気がする。

早速寮の組織づくりからはじめた。まず部屋長を決め、これを代議員として寮長の下に各寮長を置き、横断的には庶務部長、文化部長、炊事部長というのを作った。

寮は四棟しかなかったが、一番南の棟だけが二階で、あとは全部平屋だったので、一階と二階を分け、全部で五寮にした。五寮の健児は、多い時には三百を越えていたろう。一番南側の二階が南寮、一階が而(じ)寮、次の棟が巍(ぎ)寮、そして瀛(えい)寮、北寮と続く。

名附親は私である。なんで私に名附親が回ってきたのか分からない。多分、私が文化部長を仰せつかっていたからであろう。誰が私を文化部長にし、どうやって決めたのかも今はさっぱり分からない。しかし、寮の名前が決まった以上、幟(のぼり)の一つも作らんことにゃ気勢のあがるわけがないというわけで、秋の寮祭めざして旗を作ろうということになった。

旗というか幟で、その材料は各人の敷布である。私の記憶にあるのは、学泉寮という中心になる幟の材料が豊田さんからの提供である。私の敷布は南寮の幟に化けた。各寮の旗それぞれ役員の提供である。従って、全部で六流の幟ができた。これは、敷布を二つに縦に切ってつなぎ合わせたもので、字は町の三島食堂の誰かに頼んで書いてもらった。庶務部長は確か勝村君だったので、多分同君あたりが主となって作ったのだろう。

寮生活は、全くの自主自治の運営にまかされていた。寮監というのはいるにはいたが、手出し口出し全く無用という態勢であった。安藤先生、服部先生が寮監をされていたのは憶えている。それに学校側の寮管理責任者は、生徒部長の玉津徳太郎教授ではなかったろうか。ガラスが割れたから入れ替えろとか、食堂の改造、風呂の設置等要求した憶えがある。

昭和二十二年当時、私は家から二千円位送金してもらっていたと思う。多い方でも、少ない方でもなかったような気がする。寮の費用は、一切合財で八百円位ではなかったろうか。

寮の食堂は旧軍のをそのまま使っていたから広すぎる位であったし、ここで寮大会も十分開けた。炊事部長は寺崎君である。横浜の桜木町あたりからルンペンのおじさんを炊事夫に雇ってきて住み込ませていたが、まともな食事にありついた記憶はない。当時は、誰彼なしに飢えておった。食堂で食ってもなおかつ飢えておったのである。米のめしにありつけるということが余りなかった。それでも試験の最中には夜食ということでみそ汁にパンを浮かしたのを各部屋に配ったことがある。炊事部の肝入りである。

寮の各部屋では、郷里から送って来た米などでの飯盒自炊がはやっていた。部屋には火鉢が置いてあった。燃料は部屋の壁板である。ばりばりっとはがして飯盒の下に持っていく。それに、これはめしをたべる時のスプーン代わりにもなった。なにしろ、めしが炊けたというニュースが飛ぶや、各部屋からハシ一つ持って飛び込んで来るのである。だから、飯盒一杯のめし位またたく間になくなってしまう。そんな時、ハシを持たないものはこの壁板バリバリで間に合わせることになる。板の匂いというか、ゴミかニスの匂いでめしの味どころじゃないんだけれども、そんなことはいっておられないのである。おかずは塩だけ、あとなんにもなし。塩をぶっかけて食ったためしの、あの純粋のめしの味を味わったという印象は、鮮烈に今も記憶に甦る。

寮にいたおかげで全国各地の友人を知ることができた。北は北海道から南は鹿児島まで。

青森から来た連中には、よくりんごが送られて来ていた。りんごのクリームなどというのも、この時初めて食べた。九州は南国育ちの私には、それが珍しくおいしく、ふんだんに食べまくった。その代り、青森の連中にはさつまいもが珍しく、わざわざ青森まで送ってやったこともある。この青森と鹿児島の連中が一緒になったらそれこそちんぷんかんぷん、何を話しているんだかさっぱり分からなくなる。九州の私がわからないのだから、東京周辺の人たちの戸惑いは大変なもんだったろう。寮は、それら日本列島をあますところなく網羅し、併合してのいわば雑居生活であったが、共通点は、終戦直後の社会の混乱をよそに、青春の情熱溢れるままの疾風怒涛の人生遍歴の修業期間であったということである。だからすべて求道者、探求者の集団であり、独特の閉鎖社会でもあった。寮生は、寮生というだけで、一つの共通点というかタイプを持っていた。そして、大抵集団で行動していた。寮に立て籠っての共同防衛意識というのだろうか。だから、寮で何かを企画すれば、全寮あげて一糸乱れぬ集団活動ということになる。

寮祭にしても、予科祭にしてもそうである。幟を押し立ててての街頭ストーム、ファイアストームにへとへとになるまで乱舞し、怒号したのもその一例といえる。寮における私有物は、すべて共有と化した。米も、金も、洋服も、下駄までも誰のかわからなくなった。すべてそこにあるもので間に合わ

せた。

挙寮一致の粋は、何といっても箱根大清遊であろう。あれは、すでに和智寮長になっていたから私の二年生の時である。

寮から学校へ、特別に相談して、一泊二日の大清遊決行の企画を持ちかけた。相談相手は、玉津先生だったろう。寮生だけ特別に二日間の休みをもらいたい、出席扱いにしてくれということだったろう。無理矢理お願いをし、聞き入れてもらっての決行である。握り飯と草履二足ずつ各人に配給した。炊事部はトラックで食糧や釜などの材料器具を別途搬送する。我々は、三島から熱海まで汽車で行くというもの。三島駅頭での和智寮長の大演説が今も耳朶[illegible]る。りんご箱の上に立っての大獅子吼であった。

幟の竿は汽車のへりにぺたっとくっつけて運んだが、太鼓は汽車の中には入らないのである。やむなく列車の最後尾に紐でしっかり結びつけ、外に出したままぶら下げる恰好で持って行った。熱海から十国峠を通って元箱根泊り。場所はお寺であった。骨壷と一緒に、押し入れみたいな奥の方で寝た記憶がある。夜は炊事部のぜんざい会であった。

めしもあったろうけれど、どんなものを食ったのかは憶えていない。ただ、ぜんざいというかしることというか、その味だけは憶えている。よほどいい味だったのだろう。翌日は、三島へ直接歩いて来たようだ。手元に三島大社での記念撮影の写真が残っている。あの寮旗の重たかったこと、道の長かったこと、配給された二足の草履がくちゃくちゃになったこと。しかし、我々が大清遊と名づけたこの遠足は、結局一回きりだったけれども大成功であった。

学校の公認を取りつけたこと、寮生の心を一つに結びつけたこと、やればできる大事業を完成したことなど、収穫は大きかった。

私は企画、いわば言い出しっぺである。面白いからやろうじゃねぇか、というだけの非常に無責任な方だったけれども、これを受けて立った庶務部は大変だったろう。勝村、下村、吉田君あたり、それに炊事部の吉崎、影山、中園君など、まあしかしよく盛り上がったもんだ。寮生の意気高しである。

私達が寮に入ったころは、寮歌も代表寮歌が一つしかなかった。これじゃ寂しい、どんどん作ろうじゃないかということで、逍遙歌だの乱舞歌だのを作った記憶がある。あのころしきりに歌った記憶があるんだけれども、今はさっぱり覚えていない。どんな歌を、どんなに作ったのか。それというのも我々の寮の末路が余りにも哀れだったからである。私自身、最後には寮に入れずに、逃げ出すように三島を脱出した記憶がある。学内闘争に捲き込まれ、寮は、いわばその闘士達の隠れ家になったかの感があったからである。ともあれ、寮歌はよく歌った、よく踊った。

僕らが二年になった春、新入生歓迎の檄文を、三島駅の白いタイルの壁に貼りまくった。そして、新入生歓迎ストームである。その巻頭言をやるのは私の役目であった。天を仰ぎ大声を出して「挙世滔々として文弱に流れ……岳南健児の意気高し……」とやったものである。三島駅前の小石まじりの砂利の広場は、我々の恰好のストームの場所であった。踊り疲れ、歌いくたびれると、駅からだらだらと大きな道路を下がった右手に、田代グリルという三島ではピカ一級の喫茶店があった。なけなしの金をはたいて、一杯のコーヒーに時の経つのも忘れて雑談したものである。帰りには、帽子をちょいとかぶせて灰皿まで失敬してきたっけ。灰皿が欲しいのではなく、中ののみさしのタバコが欲しかったのである。

映画館に入っても、まず通路のモク拾いからはじめた。新日本劇場といったかな、映画を見に行った。ジャンコクトーの「美女と野獣」であった。モクと芸術は余り関係ないけれども、我々の超論理主義によって、みごとにアウフヘーベンしての鑑賞に、泉の湧くきれいな川べりを寮に帰りついた頃は、すでに二更を過ぎる星月夜である。月は皓々と冴え、一点の雲もない芸術の世界に陶酔し、ロマンチックな気分に浸って南寮下まで来ると、あらっ、不思議、じゃじゃじゃと雨が降ってくるではないか。驚いた私の見上げる頭の上には黒くてでかい放水管が待ち構えていたのである。上でもびっくりして、やっ、すまんすまんの声。おかげで、以来私は成長がストップしてしまった。

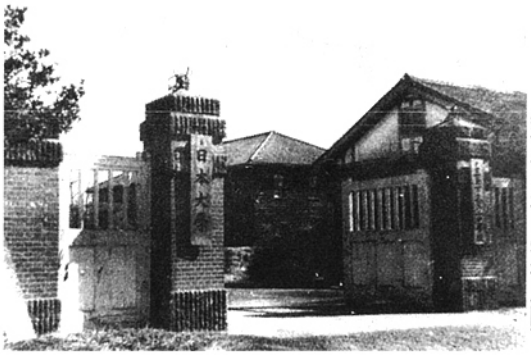
寮雨にやられたのである。そこでいささか思い出した。〝三島学泉寮は不思議なところ、月が出てるのに、雨が降る、シャンコリン、シャンコリン〟なんて歌ったもんだ。

おかげで、南寮の南側はアンモニアの臭気ぷんぷんであった。陽が照るとその蒸発度が激しく、一階の部屋などはおれたものではなかったと思うんだけど、それで寮雨がとまったかというと決してそんなことはなく、以後も依然として臭い臭いといいながら遠慮なくやっているのである。勉強に忙しくて、とても便所まで立って行くひまがなかったのである。(?)

まず、まともに便所に行ったのは、いないのではないか。もっとも、大の方は別である。これは、やっぱりそれなりの指定場所でしないことには、とてもじゃないがしまつに負えない。そこで、寮の七不思議なるものが登場する。南寮の便所の一番の東には入るな。そこには昔、そこで自殺したやつがいて、そいつが寂しさの余り声かけてきて出られなくなるぞ、とか何とかまことしやかな話をしたてて、怪談めいた因縁話まで聞かされたことがある。

寮は学校の裏手にあった。校舎を挟んで反対が正門である。正門と校舎の間が運動場であった。通学生が正門から校舎へ向かって教室に入ろうというのに、寮生は校

寮生の箱根大清遊



予科時代の正門
（現三島北中学校正門）

舎を突き抜けて正門から町へ出て行ったもんだ。代返は、大むね通学生に頼んでおいた。通学生は、まじめで、勤勉で、しかも裕福であった。寮生は、大むね不まじめで、怠け者で、しかも貧乏人だった。というより、よってたかってひきずり下ろした感じでそうなった傾向もある。私も、もともとはまじめで勤勉だったはずなんだけれども、寮生活をはじめたら、いつの間にか朱に交じわって赤くなったのであるといっておこう。教室に出るにも、どてらに袴をつけたスタイルとか、寝ぼけ面でというのが多かったが、教室での印象は余り残っていない。教室を通過して町へ出ていった記憶は残っている。

町へ出て映画館に入る。映画はまだやっていない。映画館にことわってモク拾いを認めてもらうのである。そのモクをいささか集めて、田代グリルへ行ってコーヒーを飲み、芸術を語り哲学を論じ合うのである。田代グリルの下、泉のほとりに一軒のタバコ屋があった。当時、ハッピーというタバコが二十本入りで二十円であった。

「僕らは寮生ですが、それを半分下さい」といって五十銭を出して一本の半分を買っていた。残りは取っておいてもらってまたあとで買いに行く。つまり一箱まるごと買った憶えがない。せいぜい買っても二・三本だったようだ。だから町の人達は、寮生がいかに貧乏であるかを承知していたので、着る物も粗末で貧相な学生をみると、それを寮生と決めつけていた風がある。我々自身がそのことを自認していた。

質屋通いもよくしたが、その質屋にはかわいいお嬢さんがいた。三島高女の生徒さんだったのではないか。不必要なほど通った。グリコのおまけにもらったタダの置時計みたいなものを持っていって質入れしたのもいたし、哲学書の出し入れが頻繁だった。寮生はお得意さんだったとみえ、節句の時などに行くと、菱餅までご馳走になったことがある。

広小路の駅の近くに、かなり大きなお菓子屋があった。そのお菓子屋によく出かけては、お菓子をよく頂戴した。といっても、そのお菓子屋に入って勝手に試食するのである。四―五人で入っていっては「おい、これがうまいぞ」とか「こっちを食ってみろ」とかいって買うような気配をみせながら試食する。結局は買わないで試食しただけで「またにします」といって出て来るだけであるが、店の人からとがめ立てされたことはない。人相風体からして寮生と直ぐに分かるし、哀れな若者たちだからかわいがってやらなきゃという風潮がすでにあったのではなかろうか。その代わり、通学生、つまり下宿生が本当のお客様になってくれるからということじゃなかったろうか、と勝手に思っているのだから、その辺の真偽は分からない。

いずれにしても、町の人から寮生は、一種特別の目で見られ、甘やかされ、かわいがられ、あるいは敬遠された気配がある。その一つの例。

予科祭の時には、宣伝ストームを広小路の街頭で繰り広げたものである。我々寮生は、寮旗をおっ立て、真っ裸で通りの真ん中を占拠してストームを展開した。当時は交通量も多くなかったのだろう。大通り全面に広がってのストームだから、多分交通はその間ストップしたに違いない。米穀配給所の前では、さつまいもの俵が山積みされていたが、その上に乗ってまでストームをかけた。だから、あのさつまいもは多分、くずれてしまったろうと思われるのに、そのほか店の食べ物なんかもいくらか失敬したろうに、もっともいくらかは店の方から提供したのもあったろうが、それとて何の文句もクレームもなかったというのは、いかに寮生が町の人たちに好感を持たれていたかの証左とはならないか。町の人には確かにもてた。あるいは好感を持たれたという気配はあるが、女学生にはもてなかった。寮生が近づいただけで逃げ出していくから閉口した。女学生には弱かった。

寮祭の時、ある部屋の連中は黒ん坊踊りを公開した。墨を体に塗りたくっているから、少々のことでは落ちない。寮の風呂はその頃使えなかった。そこで、町の銭湯に頼み込んで入れてもらった。もっとも銭湯の最後の最後にである。快く銭湯の側も我々の注文に応じてくれた。気持ちがよかった。体の墨をおとすのはしかし大変であった。風呂の湯が黒く変色するだけではない。湯舟の壁にまで墨が付着し、あたり一面真っ黒けである。体の墨も一ぺんには落ちない。しかし、風呂掃除までしてさっぱりとなって風呂から上がり、町を寮歌を怒鳴りながら帰ったこともあった。

風呂といえば、寮には風呂はなかった。いや、食堂の脇にあるにはあったが使えなかった。みんな町の銭湯に行ったのだろうか。私自身は余り風呂に入った記憶がない。夏になると、南寮の前の林の向こうに、プールみたいな、水溜めみたいな奇麗な水を湛えたところがあって、そこに石鹸を体中塗りたくって飛び込んでいた記憶がある。ある時、我々が真っ裸で水浴びしていたら、女子学生がやってきて覗き込んだのには驚いたことがある。水泳パンツなどというしゃれたものを身につけているわけではない。風呂に入るスタイルそのまま、水は飽くまで澄み切っているのだから、どこまでも透けて見えているのである。女子学生が声をかけながら近づいて来たので、壁にぺたりとくっついてはみたものの、どうにも窮屈で我慢ならなくなり、みんな一勢に飛び出して、原始の姿をオープンにして、女子学生を追っ払ったことがある。ほんとに風呂はどうしたんだろう。私自身、町の銭湯に行ったのは、黒ん坊の時だけしかない。やっぱりずっとはいらなかったというのが真相のようだ。

その他、アタックと称する食糧狩りもかなりあったようだ。私にはその直接の経験はないが、アタックでイモを掘ってきたというのを聞きつけて、お相伴に与かったことはある。アタックの極め付けは鶏だったろう。農家の鶏舎から一羽失敬してきて、それをぶらさげて熱海の梅園のせせらぎで料理し、すきやきにしたことがある。ネギやら醤油やら砂糖などは、三島駅前の石垣の下に並んでいた屋台から徴発したのであった。

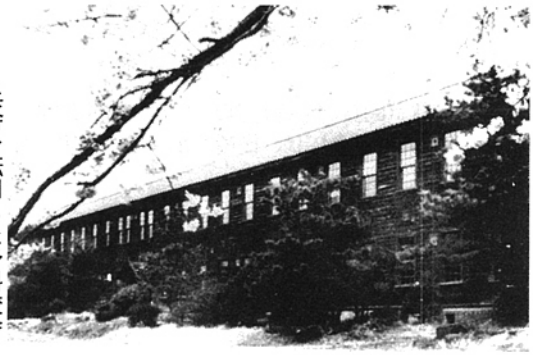
熱海では、真誠館といったと思うが、分に過ぎた旅館で大宴会を催したこともある。なんでそうなったのか定かではない。

熱海といえば、飯盒に米だけ入れて錦ケ浦に行ったことがある。熱海駅前の八百屋でおかずに沢庵だけ買って、ぶらぶらと錦ケ浦に向かったのだが、現地到着前にすでにその沢庵をかじりかじり行ったのでなくなってしまった。仕方がないので海の水で米をといで炊いたところ、おかずがいらない位に塩味がきいてよかったが、底に

近づくに従って塩辛くなり食べ難かったことを憶えている。帰路、みかん山に入り込んでみかんを頂戴していたら持主に叱られた。更にそれから岩風呂に入り、女湯へもぐって侵入したこともあった。

教室でまともに授業を聞いて勉強した記憶はない。その代わり、教官宿舎にはよくお願いにいったもんだ。正門脇にその宿舎はあった。

自分のことはいい難いので、というより私は自信があったので友人の点数をお願いしたところ「そういうお前も危いんだぞ」とおどかされたことがある。英語の小倉教授のところには、和智さんといったことがある。いつもハシを胸ポケットに突っ込んでいる先生がいた。先生も飢えていたのである。寮に来て何かないかと回っておられた時、イワシの干物をご馳走したことがあった。あれは何という先生だったのか。



兵舎を転用した予科校舎（昭和22年）

教室では余り勉強しなかったけど、寮ではずいぶんと多彩に勉強した。（?）入寮して、まず西田哲学の洗礼を受けた。主として観念論哲学の旋風の中で育ったといってよい。岩波の哲学叢書が教科書みたいなものであった。哲学書もかなり仕入れた。それらは多くはしかし質草になっていった。観念論の系譜もカント、ヘーゲル、フォイエルバッハと来て、さてそこで極めて大きな迷路に踏み込んだ。唯物論哲学の抬頭であった。社研を牙域とするマルクス、レーニン主義の活発化に遭遇したのである。寮内では、それら両者の激論が続いた。逃げ場はプラグマティズム、いやカフカの不条理の世界といった風に、思想遍歴もただならぬ時代であった。

そして、学制改革を目の前にした学園闘争である。マッカーサー政令によるイールズ声明だったかな。学生の、学内における政治活動の禁止という通達であった。これにまず反発したのが社研グループ、それに青年共産同盟（青共）や、共産党細胞の連中であったろう。私自身は、それこそ「魏然四寮に立て籠って」いたから全く関係なかったけれども、どこでどう間違ったのか、かつぎあげられて闘争副委員長。

社研や細胞、青共の連中が自分達が表面に出たのでは、色がついているからまずいということで、無色透明の私をワラ人形代わりに使ったのだろう。私自身が、おっちょこちょいでおだてに弱い体質だから、やむなくその気になってしまって、何にもわからないくせに祭りあげられたものとみえる。その時の委員長は誰だったのか。闘争委員会とか、戦術委員会とかに出た記憶は余りない。不熱心、不真面目極まる副委員長だった。大体意ならずしてかつぎ出されたという気持ちの負担が大きく、闘争そのものを自らの天職や使命と心得るには、余りにもギャップが大きすぎたのである。

それよりも何も、教授会での処分がこたえた。委員長は、多分退学処分だったろう。私ほか何名かは、無期停学処分である。すでに時は二学期の末であったろう。父兄が学校に呼び出され、処分言い渡しである。同時に寮への立入りも禁止された。忘れもしない「赤旗」（昭和二十四年一月七日付）紙上にでかでかと掲載されたのである。寮の立退きを命じられても行くところはない。細胞の連中は、アジトを用意しているからそこへ来いと誘ってくれるけれども、もうそこまではついて行けないと悟った。主体性の確立である。寮内も闘争で荒れに荒れまくり、寮のよさはなくなった。その時肩よせてくれたのは勝村君達であった。昼間明るい時は寮へ近づけなかった。刑事がはり込んでいるからである。マントをかぶって何回逃げたことか。行先は広小路近くの麻雀屋であった。麻雀屋が私のアジトになってしまった。麻雀も三島へ来てから覚えたのである。

静岡の堀之内から来ていた一級下の鈴木君、これが教えたようだ。そして、口屋（行蔵寺）の伊藤君や神谷君とこへ行った時に本格的に覚えたのか。教師は勝村君たちであった。その覚えたての麻雀も、こうなると命拾いのアジトに変った。〝同志〟からはずいぶんいろいろ批判された。オポチュニストだの、日和見主義だの、敗北主義だのと攻撃された。学校側警察と〝同志〟（私はそうは思っていなかったが、細胞や青共の連中は私をそう呼んでいた）とを敵に回し逃避することになってしまった。学校側からの処分解除の申し渡しは更にない。闘争の方は、処分と切り崩しでガタガタになり竜頭蛇尾、雲散霧消の形でなくなっていった。火は消えた。しかし、火は消えてもくすぶりは残り処分は残る。学校へ行くわけにも行かず、家に帰るわけにもいかず、麻雀屋での明け暮れが続き、寮友たちは私と行動を共にしてくれた。これが真の友だと心にその有難味を味わったものである。友の憂いに我は泣き、我が喜びに友は舞うのである。ヘーゲルもマルクスもくそ喰らえだ。なるようにしかならんわい、と、暫しやけくそを決め込んだ。そのうち学校側から、ここでやめるなら二年終了は認める、といった知らせがあったように思う。

それに学制改革でもある。行くあてはないけど潔くやめることにした。闘争の拠点になった寮を学校側が認めるわけもないし、いてももぬけの殻みたいに虚脱した状態では意味はない。新制大学への切り換えで、学校も忙しかったようだ。旧制予科はもうない。となると、それは当然寮との必然的な別離ということにもなる。春休みを迎えた南寮の一室で、糸柳とテンプラをした思い出がある。鍋やら油やらをどうしたかはおぼえていない。しかし、手もとの青い草や、南寮前に咲き誇る桜の花をちぎっては、テンプラにして食った記憶は今でも鮮やかに残っている。寮内に人の気配は全くなかった。みんな帰郷して、新学期、新制大学への切り換えに備えていたのだろう。糸柳も学校をやめる決心をしていた。学校をやめる二人が、最後の最後に寮の一室で、疾風怒涛と過ぎ去った二年間の波乱の寮生活に暫し心を託しながらの〝最後の晩餐〟だったのである。春の陽光はさんさんと窓から差し込んでまぶしかったが、心は何とも知れぬ春愁に閉ざされていたのである。

昭和二十二年から二十四年まで、長い人生の中のたったこの二年間であった学泉寮生活は、永遠に残る青春のモニュメントである。

〝桜並木を予科生が行けば、心あるかよこの花さえも、どうせ散るならあなたの胸に……予科シャン、予科シャン〟などと歌いながら寮との永遠の別れを告げたものである。

この二年間の思い出は切りがない。もっと沢山あるけれども、思い出すままに書きなぐってみた。文中誤りや失礼の個所もあるやもしれぬ。青春の思い出のくさぐさ、ともかくも一石を投じ、我らが青春を讃えるのみ。

昭和63年度　事　業　報　告

1．三島同窓会長賞授与

昭和63年度日本大学三島キャンパス在学生から，次の者が推薦された。同窓会長賞（副賞記念品）は，短期大学部２名に贈られ，平成元年３月25日の卒業式当日（日本武道館），授与式が行われ，同窓会長賞（副賞奨学金）は，国際２名，短大１名に贈られ，４月10日の開講式当日授与式が行われた。

同窓会長賞（副賞記念品）　２名　仲村　美穂（家政科食物栄養専攻）　松本　由恵（文科国文専攻）

同窓会長賞（副賞奨学金）　３名　伊藤かおり（国際文化学科）　増原　伸一（国際関係学科）

櫻田智栄美（家政科家政専攻）

1．学園歌集発行

2,500部を発行し，平成元年4月国際関係学部・短期大学部各科および法学部三島校舎の新入生全員に対し，入学祝いとして渡した。

1．会報発行

会報19号，平成元年３月15日付　８頁　3,000部を発行した。

1．各科同窓会等補助

体育奨励会に対し，大学体育団体育成を目的に，105,000円を補助した。

1．幹事会

昭和63年５月18日㈬18時30分及び６月22日㈬18時30分から，日本大学国際関係学部８号館２階で開催した。

1．総会並びに懇親会

昭和63年11月３日㈭16時から，総会並びに懇親会を日本大学国際関係学部記念館で開催した。

三島開設50周年記念準備委員会が発足した。

昭和63年度　収　支　決　算　書

（昭和63年４月１日～平成元年３月31日）　（単位：円）

支出の部				収入の部			
項目	予算額	決算額	差異	項目	予算額	決算額	差異
奨学費	160,000	205,400	△ 45,400	会費収入	1,274,000	1,281,000	△ 7,000
学園歌集発行費	250,000	195,000	55,000	雑収入	655,032	860,042	△ 205,010
同窓会報発行費	510,000	105,060	404,940	前受金収入	900,000	834,000	66,000
各科同窓会等補助	760,000	205,000	555,000				
総会並びに懇親会費	420,000	370,880	49,120				
会議会合費	350,000	183,000	167,000				
通信運搬費	50,000	27,340	22,660				
事務費	200,000	75,300	124,700				
雑費	300,000	174,600	125,400				
予備費	200,000	0	200,000				
計	3,200,000	1,541,580	1,658,420	計	2,829,032	2,975,042	△ 146,010
基金繰入額	0	600,000	△ 600,000	基金繰出額	1,200,000	0	1,200,000
次年度繰越金	900,000	904,430	△ 4,430	前年度繰越金	70,968	70,968	0
前受金	900,000	834,000	66,000				
繰越金	0	70,430	△ 70,430				
合計	4,100,000	3,046,010	1,053,990	合計	4,100,000	3,046,010	1,053,990

貸　借　対　照　表

（平成元年３月31日現在）　（単位：円）

借方		貸方	
項目	金額	項目	金額
普通預金	1,104,430	基金	19,500,000
通知預金	0	前年度繰越額	18,900,000
定期預金	19,300,000	本年度繰入額	600,000
		次年度繰越金	904,430
		前受金	834,000
		繰越金	70,430
合計	20,404,430	合計	20,404,430

昭和63年度収支について，関係帳簿並びに証拠書類を精査いたしましたが，記帳その他正確であることを認めます。

平成元年６月２日

会計監査　持田光雄 ㊞

同　中島敏男 ㊞

平成元年度　事業計画

1．三島同窓会長賞授与（副賞：記念品もしくは奨学金）

日本大学国際関係学部および短期大学部を，平成２年３月に進級・卒業予定の者を対象とする。

国際関係学部……各学科３・４年生　各１名宛　賞状及び奨学金

短期大学部……各科　１・２年生　各１名宛　賞状及び記念品もしくは奨学金

1．学園歌集発行予定

2,500部を発行し，平成２年４月国際関係学部・短期大学部各科および法学部三島校舎の新入生全員に対し，入学祝いとして渡す。

1．会報発行予定

会報20号（平成元年10月）発行　８頁　3,000部

会報21号（平成２年３月）発行　８頁　3,000部

1．各科同窓会等補助

(1)　各科の名簿編集の推進。

(2)　体育奨励会に対する補助。

1．三島同窓会終身会費の件

1．三島同窓会維持会費の件

1．日本大学100周年記念に係わる事業

1．三島開設50周年記念に係わる事業

1．常任幹事会

平成元年６月２日㈮18時30分から日本大学国際関係学部本館小会議室において開催する。

1．幹事会

平成元年６月28日㈬18時30分から日本大学国際関係学部８号館２階食堂において開催する。

1．総会並びに懇親会

平成元年11月３日㈮16時から日本大学国際関係学部記念館で開催する。

平成元年度　収支予算書

（平成元年４月１日～平成２年３月31日）　（単位：円）

支出の部				収入の部			
項目	本年度予算額	前年度予算額	増減(△)	項目	本年度予算額	前年度予算額	増減(△)
奨学費	160,000	160,000	0	会費収入	1,327,000	1,274,000	53,000
学園歌集発行費	210,000	250,000	△ 40,000	雑収入	602,570	655,032	△ 52,462
同窓会報発行費	250,000	510,000	△ 260,000	前受金収入	900,000	900,000	0
各科同窓会等補助	1,060,000	760,000	300,000				
総会並びに懇親会費	450,000	420,000	30,000				
会議会合費	350,000	350,000	0				
通信運搬費	70,000	50,000	20,000				
事務費	150,000	200,000	△ 50,000				
雑費	300,000	300,000	0				
予備費	200,000	200,000	0				
計	3,200,000	3,200,000	0	計	2,829,570	2,829,032	538
基金繰入額	0	0	0	基金繰出額	1,200,000	1,200,000	0
次年度繰越金	900,000	900,000	0	前年度繰越金	70,430	70,968	△ 538
前受金	900,000	900,000	0				
繰越金	0	0					
合計	4,100,000	4,100,000	0	合計	4,100,000	4,100,000	0

三島同窓会前副会長
故遠藤逸雄君を偲ぶ

日本大学三島同窓会
副会長　渡辺　勝一

親友をある日突然失うことは、あまりにも痛烈であり、あまりにも悲しいできごとである。

まして大学入学以前からの知己であり、ほぼ四十年近い交友をもつ遠藤君の死は、空前絶後の驚きであった。

昭和六十三年五月三十一日、同期の大井君から電話があり「おい勝ちゃん、遠藤が死んじゃった、どうするんだ、遠藤が死んだんだよ」と泣きながらの連絡をうけ、「あんな元気な遠藤が、あんなに仏みたいな遠藤が、なんで死ぬなんて、そんな馬鹿な、そんな馬鹿な、おい遠藤どうしたんだ。」と二人は解らぬ会話を繰り返したのだった。

五月三十日夜十時頃、家族団らん後トイレにたった彼が「なんだか苦しいよ」と云って伊豆長岡の順天堂大学附属病院に救急車で入院したが、動脈瘤破裂のため翌三十一日早朝不帰の客となったのである。

通夜は東海道線函南駅近くの遠藤君宅で行われ、奥方をはじめ多くの方々の話を伺い、確かに遠藤君の通夜にきたことを心の中で確認したのであった。五月三十一日は遠藤君の満五十九才の誕生日でもあった。日頃病気に縁遠かった彼が、突然の病魔に見舞われたのである。

去る平成元年五月二十八日には彼の菩提寺である伊豆大場の妙蔵寺において、親族・知己が集まり彼の一周忌を催したが、あれからも何か月が過ぎてしまった今、私は複雑な思いのまま、彼を偲ぶことにした。

遠藤君（旧姓曽根田、以下、曽根田または遠藤と呼ぶ）と知り合ったのは、日本大学入学前年の昭和二十五年十月頃のことだった。発足当初の新制高校定時制に彼も私も在学中のことである。たまたま郷里富士地区の吉原高校（定）と富士宮東高校（定）の親善体育祭が計画され、我々富士宮東が吉原高に遠征したとき、彼曽根田が吉原高を代表して大会実行委員長をやってくれた時である。勝敗は記憶にないがその時の曽根田の熱心さ、真面目さ、そして思いやり、優しさは強く印象に残っている。

当時の曽根田は、生自動車吉原工場に勤務し、勤務も勉強も、また玄人はだしのカメラの趣味をもっていた。その曽根田と昭和二十六年四月、日本大学三島教養部で再会したのである。彼は日産自動車を退職し、私も国鉄職員を辞めて新たな道に勝負をかけたのであった。

入学後のクラスは違ったが、同じ経済学部でもあり、しかも汽車通学仲間でもあったので、彼との交流は益々深まり、学問はさておき人間関係は一層緊密になったのである。

彼との想い出を記せば限りがないが、その中の印象に強く残るいくつかを紹介して、彼を追悼することとしたい。

(1)　熱海市長選の応援

次年度の役員等もほぼ内定した一年次終りの春休み（二七年春）、急遽浅野先生の依頼により、熱海市長選の応援に参画した。曽根田、村野、栗原、松本、稲葉君他が一緒だった。本命である岩本氏の応援であった。結果は我々の努力とは別に投票前夜の動きにより、非常に僅差で敗退した。この間の一週間の泊り込みの応援中、曽根田の世話役的な人間性を痛感するとともに、女性に持てることも確認したのであった。

(2)　新入生歓迎行事のこと

二年次に進級するとき、学生三団体の責任者が決定していることは当然であるが、我々の時に限り学友会の代議委員長は入学式前日まで未定であった。

入学式前日、私は、玉津先生からの電報により三島校舎に急行したところ、曽根田達同窓の役員既決定者と一部先輩、そして学生部の先生方が集まって、私を待っていたのである。秋葉先生の部屋に呼ばれて「明日が入学式である、君が受けるしかない」との秋葉先生、玉津先生のお言葉により、学友会を引受けることとなったが、そのとき同席した曽根田が「私がすべてを応援する。君はやるしかない」と助言し、翌日の入学式で新入生歓迎の辞を私がやる破目になったことを思い出す。

この新入生歓迎行事では、東洋醸造から日本酒の一斗ガメ数十本の寄付をうけ、新入生全員に振舞ったのも曽根田の発想が大きく働き、その後富士五湖周遊バスハイキングを実施する際も、三十六台のバス集め等々、初の行事を成功させたのも曽根田のアイデアと助言が結実させたのであった。

(3)　北海道遊説のこと

弁論部の地方遊説は、前年（昭和二六年）の九州遊説でテストを終え、昭和二十七年に本格的に北海道遊説を実施した。総務が私、会計が曽根田、隊員が奥田吉郎先輩、村野、宮崎、福本、一年生の平森、谷越の諸君、現地責任者が安田、渋谷であった。

曽根田はこの遊説でも実質的責任者として活躍してくれた。「津軽海峡をだてに渡るな」と申された玉津先生の言葉とともに、主役の弁士諸兄、裏方の遠藤、地元の諸兄の努力、協力がこの北海道遊説を成功させたのだと、いまだに感謝している。

以上の他、曽根田について書き出せばきりがないが、彼は大学卒業時乞われて郷里吉原市長の秘書となり、間もなく縁あって遠藤さと子氏と結婚して遠藤と名乗ることになり、更に乞われて吉原給食組合に入り長年専務理事を勤めて彼の本領を発揮し、その後、妻さと子氏が経営する「株式会社えびす」の会長となって、彼の人生の仕上げを行ってきたのであった。

おごることなく、常々努力、他人をたてることにつとめ、我を控え、人に優しく、家庭をこよなく愛した彼遠藤の人間性は、我々の鑑みとして余りある。

逝去半年前の昭和六十二年十一月二日夜、伊豆での同級会席上、「おい渡辺、俺もやっと心にきめた目標額直前まで貯えができた、あと一息だよ」と彼の感慨を聞かしてもらった。「あと一息」の彼がその夢を果したのか昭和六十三年五月急逝したのである。惜しんでも悲しんでも彼は五十九才の人生を心ゆくまで働き、勉強し、また楽しんで終えたのであるとしか思い様がない。

あの日以降、私は何回も何回もペンを執ろうとしたが、どうしても進まず今日に及んでしまった。

書き足りないことも多く、彼を讃える言葉も見付からないままに唯々、我が朋友遠藤の死を悼み、若き日の曽根田の面影を追いつつ心より彼の冥福を祈り、後任の副会長を私が引継いだことを報告するのみである。

（第四期生　東京電機大学勤務）